

## 令和3年度第1回宮代町立小・中学校一貫教育推進委員会の 会議録

### 1 日時・場所

令和3年6月16日（水）10:00～11:15

役場庁舎202会議室

### 2 出席者

審議会委員：15名出席

齋藤勉副委員長、木村委員、高野委員、山口委員、小山委員、白石（中村）委員、瀬田委員、鈴木委員、長井委員、小坂委員、杉村委員、萩原委員、金子委員、土淵委員、齋藤委員

事務局：中村教育長

教育推進課：塚越学校管理幹兼副課長、鶴川指導主事

### 3 開会

### 4 挨拶

教育長から挨拶

### 5 任命書手交

### 6 自己紹介

### 7 委員長・副委員長選出

### 8 委員長挨拶

齋藤勉副委員長から挨拶

### 9 議事

令和3年小中一貫教育の推進について説明後、各中学校区の実践について資料を基に発表があり、その後、協議を行った。

木村委員：昨年どこの小中学校にもタブレット端末が配布されたということで、宮代町ではどのように授業で活用し、その中で、小中で連携した活用方法があるのでしょうか。

塚越（事務局）：宮代町では、昨年度末には各小中学校、児童生徒一台ずつ配布は終了しています。実際に使い始めているのは本年度からで、今お話しいただいた小中連携でどのような活用の仕方があるかについては、ちょうど今進めているところで、具体的な活用例は少ないと思います。まずは、各学校でどのように有効に活用していけるか研究を進めています。今後、小中の連携でどのように利用するかを進めているところです。

小坂委員：私は群馬出身で宮代町にはゆかりのないものですが、宮代町らしさを小中学校で連携して教育に取り込むことをお考えなのか伺いたいです。

塚越（事務局）：宮代町独自ということであれば、島村盛助氏を顕彰する英語活動発表会があります。郷土の偉人である島村盛助氏は、岩波英和辞典を編纂された方

で、その功績を顕彰するとともに、各中学校区で、英語の学習成果を小中お互いに発表しています。昨年は、コロナ禍で、交流が難しかったのですが、本来は、小中学生が一堂に会して交流していることが宮代の特色で、今後も継続して取り組んでいきたいと考えています。

小坂委員：各校の取組を見ていると、農業に対してのかかわりがなかったように思うのですが、宮代町では、巨峰とか、農産物を育てていこうと、外部の企業とかを誘致しての取組をしていると思いますが、小中で農業体験とか一緒にやっっていこうなどの考えはありますか。

塚越（事務局）：事務局からそのようなことをお願いすることはありませんが、各中学校区で取組んでいただけるのであれば進めていただきたいと考えています。

長井委員：中学生が小学校に行くと、小学生の意欲が高まって教育的効果があると話がありました。本校では、4月12日に小学校の先生が中学校の授業参観に来てくれました。その時の1年生の頑張りが良くて、1年生の両クラスの目標が「小学校の先生方に成長した自分たちをみせよう」と決めて、頑張っていました。この様子を見て、小中一貫教育が効果的だと思いました。

私は、着任したばかりなので、これから計画に沿って百間小と関係を作っていきます。

金子委員：宮代町出身ですが、私が小中学生の頃は、小中連携というものはありませんでした。小学校の時に中学校の授業を体験するとか、中学生が陸上であるとか吹奏楽であるとか、中学校の技術なりレベルを小学生に教えるとか見せることで中学校もレベルアップするし、学べる側の小学生も「違いがある」「凄いな」と実感できる。勉強にしろ、運動にしろ、関わっていることがお互いに刺激になって素晴らしいことだと思う。このようなことが昔にもあったら、私がどのように感じたか想像もつかないのですが、色々な交流をしながら小中共にいい学びをしてくれたらよいと思います。素晴らしい取り組みであるので、これからも続けていただいで、コロナが落ち着いたら小学校同士、中学校同士のつながりを持っていただいで、さらに色々なつながりや気づきがあるのかなと思います。私が中学校に入るときに、新しい中学校の2期生として入学したのですが、小学校3、4年生のころまでは、別の中学校で色々な子たちと一緒にになれるのだと楽しみにしていたところ、5、6年生になって新しい中学校ができることになりました。他校と混ざる体験も子供たちにとっては良いことなのかなと思うので、他校と一緒にいるよさと、そのまま続ける良さを、お互いの立場で情報交換しながら町全体としてより良い成長にしていだけたらと思います。

土淵委員：子供が東小学校から百間中学校に入学して、笠原小学校の皆さんと一緒になっています。私自身も3つの小学校から1つの中学校で一緒になる環境の中で過ごしてきて、高校に進学したのですが、須賀小学校や百間小学校の方はそのまま9年

間過ごし高校に進むので、戸惑いもあるのではないかと思います。そのような中で、小中の連携は、小学生の面倒を見る、上級生としての考え方を高校生でも生かせるようになるのではないかと、自分の子供が高校で、幼稚園以来の友達に9年ぶりに再開したのですが、その子は、百間小学校、前原中学校卒業でしたが戸惑いもなく楽しく過ごしていると聞いています。9年間過ごした先の子供の成長を楽しみにして、先生方と保護者と協力していけたらいいなと思います。

杉村委員：3中学校区の発表があり、コロナの影響が大きく「戻るのか」「戻らないのか」、そのまま進めるのかいろいろな考え方があると思うのですが、小中一貫の中でも、進むという選択肢もあるのかなと思います。どうやってこの環境の中で違った連携ができるのか、今だからこそ考えられる良い機会と期待したいし、私たちの知恵が少しでも役に立てれば知恵を絞りたいなと思います。新たな発展の機会と楽しみにしたいです。

萩原委員：私は出身地では、小学生の時は中学生との交流が全くなくて、中学校に入学するときに2つの小学校から集まってくるのですが、最初の1年間は、他校の小学校の子との交流が難しく、同じ小学校出身の子と集まってグループができ、その中に入っていくのは、自分の子供に当てはめると自分からグループの中に入っていきのは難しいと感じていて、今は小学校で中学校のお兄さんお姉さんと交流させていただいて、少しでも中学生のお兄さん、お姉さんに慣れてくれれば、中学校に入学した時に、中1ギャップが解消されるのではないかと思います。高校に入学する時もうまくなじめるようになってくれればいいなと思っています。

齋藤委員：子供が私と同じ小中学校に通うという、不思議な縁を感じながら過ごしています。1つの小学校からそのまま1つの中学校に入学することは確かに、他校の生徒との交流する機会がぐっと減ります。ずっと同じ6年間を過ごし、心の成長の違ってくる3年間に幼い頃からずっとお互いを知っていることは、ほっとすることもあると思うが、ずっと知られているという、先入観を持ってしまっていることもあると思う。そこから、子供たちが新しいことを始めようとする、殻を破るような力をつけてくれたらなと思います。私自身も、小学校ではあがりしょうで、人の前で発表することが苦手で、中学校では視聴覚委員になりました。姿が見えなければ何とかなのではないかと始めました。見られている目から逃れたいとの思いが働いたと思います。子供たちも言えない部分を持ちながら過ごしているのではないかと思います。3年間を過ごして高校に入学後は新しい世界が待っています。卒業生に聞いたことがあるのですが、どういうふうに友達を作るのだけ、という話題を聞いています。不安だけではないことは確かなので、新しい友達を作ることに希望を持って高校入学に望んで、そこからなかなか友達ができなくて学校になかなか行けなくなる子もいなくはないと思います。先生方も9年間を通して心の成長を大切にしてくださっているとありがたく思っています。

学校以外の心の成長の過程をサポートしていきたいと思っています。

木村委員：去年、今年とコロナで学校行事が制約される中、先生方が代替案とか色々なことを考えてくださっていること感謝しています。コロナの感染症対策や安全面で先生方が対策していただいている、子供たちの健康を守っていただいていること感謝しています。

今回説明を聞いていて、小学校6年間、中学校3年間の学びを9年間の大きな枠の中で、「いかにスムーズに成長につなげていくか」というところで検討されているのは素晴らしいことだと思っています。小学校で教科担任制が入ってくると思うのですが、その時に先生方の交流の研修会が有効に働くのではないかと思います。コロナ禍で職場体験ができなかったり、サマースクールで中学生が教えるに行けなかったり制約が多いのですが、コロナが収まった時には、小中学生の交流が子供たちの意欲につながるし、職場体験などは将来の夢につながる部分が多々見受けられて、有効な行事になるので再開していければいいなと思います。夢を持つと勉強のモチベーションにもつながるし、学校行事にも充実して取り組めて、学校という空間が子供たちにとって楽しい、安全な場所であり続けて欲しいです。先生方そして、保護者の方々の協力をよろしくお願いします。

齋藤副委員長：各校の発表、委員のみなさまのお話しを受けて、小坂委員から郷土の話がありました。確かに群馬県は上毛かるたをやったり、運動会で団の名前に山の名前を使ったり、そういうものが取り入れられたら、住民としてうれしいなと思います。ぶどうの名前、巨峰の名前でも、「宮代町の名産は、ぶどうだな」と、島村盛助氏は辞書を作った方ですが、それを子供たちが誇りに思えるようなことができ、なおかつ、宮代の名前の由来になっている姫宮神社、身代神社からなぜ町の名前はできたのか、郷土意識を持てるような内容になっているといいなと思っています。金子委員からは、継続することのデメリットのお話がありました。9年間継続するデメリットがどこかにあるのかなと感じています。9年間同じでいることはどうなのか、人間はリセットしたい願望があります。中1ギャップは、ギャップをいい面に生かすか、悪い面と捉えるかがあると思います。子供を見ていて小学校6年生と中学校1年生とほんの1日か2日しか変わらないのですが、できてしまうことがたくさんあるのです。中学生になり、行動が変わるのです。子供を見ていて、この前までできなかったことが、ほんの3日間でできてしまうのです。朝起きて、自転車乗って、学校に行って、この前まで「グダグダしていたこと」ができてしまう。これは、よいギャップかと思います。変わるチャンスなのですね。小学校でできなかったことが、中学校でできるようになりたいと願望をもっているわけで、願望を強く生かせるような指導があるといいのではないかと思います。

それから、小中の話の中で小山委員が中学校に勤務されていたが、今は小学校で勤務されていて、小学校の中から中学校を見るとこんな印象だ。というお話がありました。小中一貫で一番課題になるのは職員の文化の違いが大きいと感じています。職員室の雰囲気も違うのだろうし、子供に対する接し方も違うだろうし、そうすると、職員、先生方が感じている以上に受け手側の子供はそれ以上のことを感じているのではないのでしょうか。中学校の先生はよく言われている「怖い」イメージ、今はそういうことはないのですが、昔は怖かったですよね、「怒鳴りつけられる」など、学校文化の違いがあると思います。小学校から中学校へ入学する時に、小中連絡会で、子供の様子を情報交換することをどこの学校でも取り組まれていると思います。職員の交流、指導者側の交流が一番大切かなと思っています。小学校の先生と中学校の先生がうまく交流してもらって、同じ目線で見られるようになって、小学校の先生は、中学生になるとこうゆうことが必要になってくるから、このことを小学校では必ずやっておかななくてはならない。つまりきの部分を解消しておかないと、中学校に来て「分数ができません。」などの子がいます。例えば小学校の先生が IT で教えていただける小中連携のよさというものが、うまく活動できるととても良いです。そこに、木村委員がお話ししていた ICT を使う。コロナ禍を乗り切るためには、対面でできないのであれば ICT を使うしかない。リモートで授業をやってみると、ありがたいですよ。リモートでやると多分画像が残せるので、今度は小学校同士の連携、小中連携でこのような取組をしていると画像を見てもらって、「こんな授業をやっていますと」この蓄積ができることによって教育力が向上すると思います。私は、蓄積のないものは向上しないと考えています。蓄積していったものを宮代町の教育の宝にしていくと、子供たちが健やかに育つかなと思っています。

日頃から、校長先生方が苦勞されていることは十分に分かっていますが、よりよい学校を作ってほしいと願っています。

## 10 その他

### 事務連絡

## 11 閉会